研究テーマ	当院回復期リハビリテーション病棟を退院された 脳血管疾患患者の自宅復帰因子の検討

病　院　名	医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演　　者	○佐々木明日翔(ささき あすか)(理学療法士)　加賀屋眞美(理学療法士) 門脇佑輔(理学療法士)　藤澤昌弘(理学療法士) 伊東貴広(理学療法士)

概　　要

【研究背景】
当院の回復期病棟入院患者は現在90%を脳血管疾患患者が占めている。その中で、在宅復帰率は78.1%(2023年12月時点)となっており、全国平均と近い水準にある。リハビリテーション(以下リハビリ)を実施している高齢の入院患者は、低栄養を合併していることが多く、当院も例外ではない。医師、病棟看護師、栄養士、セラピストなど他職種間で連携を図ることで回復期病棟におけるリハビリを効率的に進められることが望まれる。

【研究目的】
回復期病棟を退院された脳血管疾患患者の退院先に関連する要因を検証し、看護・リハビリの一助にすること。

【研究方法】
対象者は当院の回復期リハビリ病棟を2022年4月1日から2023年3月31日までに退院された脳血管疾患患者111名のうち、以下の変数(性別、年齢、同居者の有無、在院日数、退院先、CONUTスコア(栄養指標)、機能的自立度評価法(FIM)、FIM利得)に関し、欠損値がない者(80名)とした。対象者を自宅群(54名)、非自宅群(26名)に分類。退院先との関連性を検討するため、性別や同居者の有無、入院時のCONUTスコアにはPearsonのカイ二乗検定、その他の連続変数にはWilcoxonの符号付順位和検定(Mann-Whitney)を実施し、2群間の差を比較した。統計ソフトはR4.3.2を使用し、有意水準を5%とした。尚、本研究は当院倫理委員会の了承を得ている。

【結果】
入院時のCONUTスコア(P=0.014 P＜0.05)、年齢、在院日数、FIM利得(P＜0.01)に有意差が認められた。

【考察】
当院回復期リハビリ病棟を退院された脳血管疾患患者を対象として、退院先との関連性をPearsonのカイ二乗検定、Wilcoxonの符号付順位和検定(Mann-Whitney)を用いて検討した。その結果、入院時のCONUTスコア、年齢、在院日数、FIM利得に有意差が認められた。今回の結果から、年齢、在院日数の要因に加えて、FIM利得、入院時の栄養状態(CONUT)が良好な患者ほど自宅退院との関連性が高いことが明らかとなった。西岡ら[1)]は『リハ病院入院時に栄養障害を認める患者は急性転化や長期療養型病院への転院が多く、在宅復帰ケースが少ない』と述べている。また、自宅復帰率に影響を与える因子として、年齢が若い傾向にあること、リハビリ日数が短いこと、入院時FIMの運動および認知項目が影響することを報告しており、本研究も先行研究を支持する結果となった。

【今後の展望】
本研究では退院先と栄養指標などその他の因子が関連している可能性は示せたが、関連要因の検証までは言及できなかった。今回の研究結果を踏まえた上で、新たな理学療法評価といった身体機能的な要素を取り入れた研究デザインを再検討していくことで退院先との関連要因を検証していきたい。

【引用・参考文献】

1)西岡心大,他:回復期リハビリテーション病棟入棟患者における栄養障害の実態と高齢脳卒中患者における転帰・ADL帰結との関連.日本静脈経腸栄養学会雑誌,2015.
2)高濱祐也,他:回復期リハビリテーション病棟からの在宅復帰と栄養指標との関連.理学療法科学,2022.
3)岡本伸弘,他:回復期リハビリテーション病棟におけるFIMを用いた自宅復帰因子の検討.理学療法科学,2012.